
流れゆく日々の中で

赤めがね

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

流れゆく日々の中で

【Nコード】

N4974M

【作者名】

赤めがね

【あらすじ】

平凡な少女が転校した先は、全寮制の進学校。多くを語らない彼女だが、穏やかな雰囲気周囲の人間は惹かれていく。しかし、そんな穏やかな日々は簡単に崩れていく。

はじまり（前書き）

思うままに書いたものです。

文章能力が低いので、温かく見守ってくださればと思います。

はじまり

幸せだった頃の夢を見た。

近くにいても触れられない君が一緒にいると言ってくれた。

君がそばにいてくれるようになって、

君といることが当たり前になってた。

そんな日々が嬉しくて幸せで、忘れてしまっていたんだね。

永遠なんてものはないんだってこと。

気付かなければよかったのにね。

気付けば君といることがつらくなって。

どうして君の隣に自分がいるのかさえも分からなくなった。

そばにはいられないと思った。

ごめんね？

壊れてしまうことが怖くて逃げた私をどうか許さないで――。

第1話

桜の花が散って、少しずつ学校に慣れてきた5月半ば。

雲1つない快晴の空の下、中庭の木に寄りかかりながら弁当を食べ進めていた。

「つばさ、ご飯こぼれてる。」

「へ？ あ、ほんとだ。」

スカートの上に落ちたご飯粒を拾いながら返事したのは海堂つばさ。そしてここは全寮制で中高一貫の学園『月城学園』の高等部第3庭園。山奥の広大な敷地に建てられた学園は、校舎はもちろんのこと生徒が利用する学生寮までホテル並みという金持ちの集まる学園である。

海堂つばさは、そんな学園に今年の春外部入学を果たした高等部の1年生である。

外部入学の枠は2人と狭き門であったが、もともと別の中高一貫の進学校に在学し、常に成績トップであったつばさにとっては大きな問題ではなかった。

そして、今つばさに声を掛けたのはつばさの数少ない友達のみと、北條 上総。つばさと同じ1年S組で、軽くウェーブのかかった茶髪のロングヘアーに、くりくりの大きな瞳をした体型もモデル並みの美少女である。

つばさは、黒髪ストレートのロングヘアーに黒縁の眼鏡をかけた平凡な少女であるため、上総といるとよく周囲の視線を集めていた。

「ねえ、つばさ。」

「ん？」

「もう授業始まる。」

つばさがぼーとしながら持っていた携帯を見ると、あと5分で本鈴が鳴る時間であった。ここから1年生の教室までは走ればぎりぎり5分という距離。しかし、つばさはそのまま残りのおかずを食

べ続けながら言った。

「天気いいし、ご飯食べ終わってないからここにいる。」

その場にうなだれる上総。そんな上総を不思議そうに覗き込むつばさ。

「上総ちゃん。どうしたの？」

「どうしたのって・・・理由それだけ？」

「うん。だって走ると暑いし、次の授業自習だし。」

「え？そうなの？」

「上総ちゃん・・・けっこう抜けてるよね。」

「うるさい！」

つばさがカラカラと笑うと、上総は頬を赤く染めてふてくされていった。

普段からのんびり屋なつばさを心配して世話を焼いてくれるところと、時々こうやって天然なところが上総のいいところだとつばさはぼんやり考えていた。

「まあ、今はいいとして放課後はどうするの？私、生徒会があるのだけど。」

「んー、じゃあ先に寮に戻ってようかな。」

「そう？じゃあ、寄り道にしないでまっすぐ帰るのよ？」

「はい。」

上総の言葉につばさは読みかけの本を開きながら適当に返事をし、本を読み始めた。そんなつばさを呆れながら上総は深いため息をついた。

2人の出会いは入寮日。同室となった2人だったが、上総がとてもつばさを気に入ったらしく、教室も一緒であったため、いつも上総

はつばさのそばにいた。他にも友達はできたが、昼食は2人で中庭でとるようになっていた。それも、上総目当ての男女が多く、静かに過ごすため人気の少ない場所を選んだからである。お弁当はつばさの手作りで、上総の分も作っている。そうやって過ごすことはつばさも気に入っていた。

生徒会の資料に目を通している上総をちらりと見たつばさは、本を開いたまま、放課後の事を考えていた。

第2話

――放課後。つばさは上総と別れ、ひとり図書館に向かった。

この学園には図書館がある。一般的に使用されているのは図書室の方であったが、古い蔵書が数多くあり、教室棟から遠く利用者が少ない図書館がつばさのお気に入りであった。

いつものようにつばさは図書館の扉の横にあるセンサーに学生証をかざし、扉を開けた。つばさが借りた本の返却手続きをしていると、扉の開く音がしたので扉の方を見た。

「よお。早えな。」

入ってきたのは、金髪でシャツのボタンを3つ開け、ピアスやネックレスなどのアクセサリをじゃらじゃらとつけたいかにも不良といった風貌の男だった。金髪は襟足が少し長く前髪はアシンメトリーになっていて、染めているがさらさらと痛みがなく、長身ではどよく筋肉がついていると思われた。顔も整っていて、いわゆる美形である。

「・・・こんにちは。」

現れた男に驚くこともなく、表情を和らげてあいさつを返す。男も少し微笑みながら返事をした。

「おう。」

「今日は昼寝してなかったんですね。」

いつも寝てるわけじゃねえと言いながら、つばさのそばまで歩いて行く。

「まあ、たまにはな。んで、今日は何？」

「あ、ちよっと待って下さい。」

つばさは男の言葉で思い出したようにかばんに近づき、その横に置いていた袋から小さな箱を取り出した。男の前まで行くと蓋を開けた。

「はい。今日はベリータルトです。」

「やった！食っていい？」

「もちろんです。」

満面の笑みでケーキの箱を受け取り食べ始めたのは、入学してすぐにこの図書館で出会った先輩である。

初めてこの図書館に訪れた日、窓際で寝ている人に気づかず、本を探して立ったまま読んでいるとあくびが聞こえ、やっとなつばさは人がいることに気づき視線をやった。校章バッチの色から3年生であることがわかったが、特に興味もなかったのでそのまま視線を本に戻した。

その姿に男は一瞬目を見開いたが、ベンチから起き上がり、じつとつばさを見て声をかけた。

「おい。お前名前は？」

「……。」

「おい、人が聞いてんだから返事しろよ。」

返事をしないつばさにイラッとしたのか、声が低くなったが、つばさは気にしなかった。しかし、じつと睨んでくるので、ため息をついて声を発した。

「……私の名前を知る必要が？」

「は？」

想像と違った言葉に男はわけがわからないという表情だったが、気にせずつばさは話を続けた。

「私はたまたま本を借りに来ただけです。たしかにあなたの眠りを妨げてしまったのかもしれませんが、名前を教えなければいけない理由はありませんし、まず、初対面で先に名前を教えろというのはどうかと思います。」

冷たい表情で興味なさげに男を見ながらいうつばさに驚いた顔をしていが、すぐに表情を崩し、声をあげて笑いだした。

「はっ、ははっ！おもしろいな、お前。」

「・・・はあ。」

「お前の言う通りだ、悪かったな。俺は3年の鷹だ。ここへは毎日のように来てる。なんたってここには人が来ないからな。」

「はあ。」

つばさはまた興味がないと適当に相槌を打つ。

「んで、お前の名前は？見たとこ1年みたいだけど。」

ベンチから立ち上がり、つばさのそばまで来ると顔をのぞき込み、まじまじと観察しながら言った。そんな鷹から一步後ずさり、面倒くさそうな表情をしながらも顔を上げ、鷹を見て言った。

「・・・海棠つばさです。」

「つばさか。俺のことは鷹って呼んでくれ。よろしくな。」

最初に見た時の不機嫌な顔から一変して、柔らかに笑う鷹につられて、つばさは少しだけ微笑んだ。

「先輩、変わってますね。」

「そうか？つばさの方が変わってると思うぞ。あんなこと言われたのは初めてだ。」

見た目と違って悪い人ではないと判断したつばさは、少し考えた後、改めて鷹を見て言った。

「よろしくお願いします、鷹先輩。」

これがつばさと鷹の出会いである。

第3話

それ以来、毎日来ているのかつばさが図書館を訪れると常に鷹がいた。

少しずつ会話する機会が増えると鷹が甘い物好きであることが分かり、料理の腕がプロ並みのつばさは図書館を訪れる度にお菓子を持参するようになった。

最初は興味なさげであったつばさも話してみると気が合う部分が多いことから、徐々に心を開いていき、笑うようになっていった。

鷹がベンチでケーキを食べているのが見える向かいのテーブルに選んだ本を数冊置き、椅子に座って本を読んでいたつばさだったが、ふと顔をあげて鷹をみた。

「鷹先輩、ひとつ聞いてもいいですか？」

「なんだ？」

「どうしてここには人がこないんでしょう？」

鷹がケーキを食べるのを止め、考える素振りをみせたあと、またケーキを食べながらつばさを見ながら言った。

「もともとここは、教室棟から離れているし、他の生徒は近い図書室を使ってるからじゃね？」

「そんなものですかね？ 私はここで鷹先輩としかお会いしたことがないので、いくら利用者が少ないといっても誰にも会わないというのは・・・」

「まあ、そのうちだれか来るかもな。」

つばさは納得できなかったが、適当に答える鷹を見てこれ以上聞いても答えが返ってくるとは思わなかったので、本を閉じ自分の分のケーキを食べ始めた。

適当に返事をしていたが、ここに鷹以外の生徒が来ないことは本人が一番知っていた。それは、鷹がこの図書館への一般生徒の出入りを制限した張本人だからだ。

入口にあるセンサーに一般生徒の学生証を差しても開錠しないようになっている。元々鷹がいることで近寄る者が少なかった図書館であつたが、つばさに会ってからに限られた生徒しか利用できないようにしたのだ。

なぜ、こんなことをしたのか鷹にはよく分らなかった。ただ、この時間を邪魔されたくはないと思つた。

そして、つばさは鷹が思っていることも、鷹がこの学園でどういった地位にいるか知らなかった。

知らなくても問題はないと聞かずにいたことを後に後悔することになるとは思いもしなかった。

第4話

学園の生活にも慣れた6月。相変わらず図書館でのお茶会？は続き、慣れた日常を繰り返す日々をつばさは送っていた。

鷹との関係も相変わらずであったが、居心地の良さに通うことが楽しみになっていた。

月曜日。いつものように登校していたつばさと上総だったが、校舎内が騒がしくなっていることに気づいた。

「上総ちゃん、なんだか騒がしいね。」

つばさが疑問を投げかけると、上総は眉間にしわを寄せた。

「会長が戻ってくるのよ。」

「会長？いなかったの？」

つばさがきょとんとした様子で返すと、上総は一瞬考えた後、思い出したように話し始めた。

「そういえば、入学式いかなかったものね。今まで会長は城山学園に編入していて不在だったの。なのに、突然戻ってくるって言い出して。」

「なんで？」

「もともと人を探しに行ったという噂だけど、詳しくは知らないわ。とにかく、突然帰ってくるなんていうから学園中大騒ぎよ。」

突然の話で、生徒会はさらに忙しくなってしまったらしく、上総はため息をついた。

つばさは最近の上総の忙しさを思い出して納得する一方、少しだけ胸騒ぎがした。

「というわけで、1限目は講堂で会長就任式とあいさつがあるのよ。」

「

「今から？めんどくさいなあ。」

興味なさげなつばさは教室へ入り、席に着く。

他の生徒たちは会長を拝見したいとさっさと講堂に向かっていった。

つばさに向かう気配がないと感じると、上総がつばさの手を引く。

「一応、公式行事なんだから。行くわよ。」

「絶対？」

「絶対！ほら早く、始まっちゃう。」

上総に無理やり引っ張られて、しぶしぶつばさも講堂へ向かった。

講堂へ入ると、ほとんどの生徒が集まっているようだった。

月城学園は1学年S組・D組の200名で全校生徒が集まるとなると講堂は人でいっぱいだった。

「混んでる。帰っていい？」

「だめ！ほら並んで、私は生徒会があるから行ってくるわね。」

そう言っ上総はステージ裏へと向かっていった。

サボると後が面倒なので、つばさは黙ってクラスの後ろの列に並んだ。

つばさが列に並んだ後、すぐに講堂内の電気が消された。

第5話

ざわつく中、マイクのスイッチが入りスピーチが始まった。

「これから生徒会会長就任式を始めます。」

ステージ上のライトがつき、全員が視線を向ける。

「城山学園に編入されていたため延期となっていました就任式ですが、今週から月城学園にお戻りになることが決定いたしました。それでは、生徒会会長、神王薫様、ひとことお願いします。」

上総のスピーチをぼんやり聞いていたつばさは、その言葉でステージに目をやった。

そして現れた人物を見て、この場にいたことを後悔した。

（なんで・・・）

現れたのは銀髪の長身の男だった。

瞳は金色で人々を圧倒するオーラを持っていた。ゆるく着崩した制服は清潔感を損なわず、色気を醸し出していた。

会長は上総からマイクを受けとると、話し始めた。

「神王薫だ。新生、遅くなったが月城学園への入学を歓迎する。」
スピーカーから流れる声を聞きながら、つばさは下を向いて震える体を必死に抑えようとしていた。

（なんで・・・どうしてここにいるの・・・）

そして、次の言葉にさらに絶望することになった。

ステージ上の神王薫は、表情を変え、微笑みながら告げた。

「最後に1つ。遅くなってごめんな、翼。もうすぐ会いに行くから。」

その言葉を聞いた瞬間、近くにあったドアからつばさは飛び出して

いた。

講堂内はざわつき始め、人ひとりいなくなっても気づかれることはなかった。

しかし、開け放たれたドアの方を見ながら笑みを深くした薫がいたことを、つばさが知ることはもちろんなかった。

第6話（前書き）

話が展開していきます。

第6話

休むことなく講堂から走ってきたつばさは、図書館に入っていた。講堂ではまだ集会が続いているらしかった。図書館のスピーカーからは騒がしい生徒たちの声と、それを制止する生徒会役員の声が聞こえていた。

つばさはゆっくりと窓際のベンチに近づくとき力なく座り込んだ。

心臓の音が体中に響き、無意識のうちに自分の手を握り締めていた。誰もいない空間にはスピーカーから流れる声だけが響いていたが、つばさのなかにはさっきの言葉が何度も流れていた。

『遅くなってごめんな、翼。もうすぐ会いに行くから。』

思い出すだけで体が震えた。必死に肩を抱くが震えは止まらなかった。

言葉とともに会いに行くと言った彼の顔を思い出す。やさしく微笑んでいたように見えたが、つばさにはその微笑みに、その瞳に狂気を見た気がした。

気付けばスピーカーからの音は途絶え、代わりに授業開始のベルが鳴った。今のつばさにはいつものように授業を受けることはできなかった。元々特待生制度により、成績さえよければ授業は免除されていた。何も考えずに座り込んでいると制服のポケットが振動した。携帯には上総からのメールが届いていた。集会の途中でつばさが出て行ったのをほかのクラスメイトに聞いたらしく、「今どこにいるの?」「何かあった?」と何通も送られてきていた。

深呼吸して落ち着くのをまってから、つばさは上総にいつもの調子で「天気がいいから寝てく。」とだけ返し、携帯の電源を落とした。

少しずつ冷静さを取り戻し始めると、つばさはくすりと笑った。

「この生徒会長とはね。まったく、神様はいじわるだなあ・・・。」

「

離れていた時間はそう長くはなかったが、穏やかな日々慣れつつあったつばさにはとても懐かしく感じていた。数ヶ月前まではすぐそばにいた存在だった。

失うことが怖くて手放してきた存在。

彼がくれたピアスに触れながら瞳を閉じる。

思い出すのは入学する前のこと。

つばさが”翼”^{よく}と呼ばれていたあの頃――、

第6話（後書き）

長く放置してしまってますいせん。

これから亀更新になりますが、読んでいただけたらうれしいです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4974m/>

流れゆく日々の中で

2011年10月6日07時25分発行